

ビザンチン山村カストリア

田中 友三

ビザンチン研究者にとってカストリアほど、歴史的に豊かで興味深い題材を提供してくれる山村は、ギリシャ全土を探索しても容易に見出すことは出来ないであろう。聖アトス山は世俗社会から隔離された世界の隠遁修道僧の共同体で、いわば消滅せんとする過去の時代の伝統や文化を今日に伝承する場だが、カストリアは中世期から侵略するブルガリア、ユーゴスラビア、アルバニア民族等の北方民族の影響下で、独自かつ前衛的な役割を果たしつつ、今日の私達に旧と新の調和したシルエットを投射してくれる、ビザンチン商人達の辛苦に染まった土地である。

聖アトス山で孤立した共同体組織を垣間見るとしたら、西方マケドニア国境のカストリアでは、ビザンチン庶民や技術者が世代から世代に絶えることなく育んできた毛皮製品の製作に力を注ぐ、素朴な村人の日常の営みが見られるのである。

共和制国家の今日、オリスティヤドス湖と国境地方の山岳に包まれた村落の住民は、新しい街並みの中に、そして古き伝統ある様式と美術の中に真実の叫びを受けとめつつ、古きと新しきは相互に交錯しつつも、古きは新しき時代の変革の波に押し流されることなく、歴史の重荷を背景に新しきを受け入れている。アテネやテサロニキでは決して発見されることのない伝統や習慣、それらの精神的な結晶は、中世期に建立された 72 もの正教会や、村内に点在する様々な富豪商人館に見ることが出来る。

発展してゆく世界の歩調から外れ、孤立した国境地方という先入感のみで、世界各国の観光客に無縁な山村として見捨てられてしまった。そんなカストリアへ、今、私は旅立とうとしている。マケドニア地方西部のカストリアは、アテネからバスに乗っても 11 時間の長丁場、空の旅であっても一週間に 3 便しか飛ばないという国境地方である。

この村に関するビザンチン文献は乏しいが、ビザンチン村として崇められている是非とも訪問しなければならない都市である。神話によれば紀元前 9 世紀頃、カストラスが統治したといわれるこの地の先住民は、デルフィのアポロン信託に従い湖周辺に定着するようになった。しかし、この伝説の根拠は何もない。又、この地がかつてはケレトロンと呼ばれたことも、カストラスと密接な関係があったようにも考えられる。紀元前 800 年頃には相当数の人々が定住したので、マケドニア王朝期のフィリッポス 2 世や息子のアレキサンダー大王期には、マケドニア軍が主要部隊を編成し、地形的にも軍事的にもマケドニアの軍事的拠点となった。後世、ローマ人によってカストリアと名付けられたことからみれば、古代ギリシャ地方においては強靱な要塞としての立地条件を有していたことが推測できる。

この地は紀元後 196 年にローマ帝国の一属州と化すと、その後の 500 年間はローマ人の活動の拠点となっていった。紀元後 300 年、東方ニコメデアを軍事拠点として四大皇帝制に基づき、ローマ帝国を支配していたデオクリテアノス皇帝は、特にこの地の要塞の再建に力を注ぎ防壁を完成させ、その貢献からデオクリテアノスポリスと改名される程であったから、コンスタンティノポリス等と比べ合わせてみればその規模が想像できよう。

このデオクリテアノス皇帝のカストリアの再建による防衛力の強化によって、二つの四角形の見張塔と、その周りをめぐらす防壁が構築され、湖岸地方は一層揺るがない防衛力を誇った。その 150 年後のイウスティアノス皇帝期(527-565)には異邦民族の南下を遮断する目的をもって、以前の防壁は再度強靱に建造され、湖に面した強固な防壁にはさらに 7 つの見張塔と 4 つの入場門が建造され、非常時には常に閉鎖できる状態となった。その頃には人々は、カストリアを皇帝名になぞらえて、イウスティアノスポリスと呼ぶようになっていたのである。イウスティアノス皇帝は 45 歳の晩年期に父皇帝イウステノスの後を継ぎ即位したが、ナポレオン同様、ローマ帝国領土拡張の夢を日夜追い求め、十分な睡眠をとることはなかったといわれる。彼は競馬場の一踊り子から一夜にしてビザンチン臣民を驚嘆させて、一躍皇帝の妃となったテオドラの影響下に日々あつたと伝えられている。しかし、イウスティアノス皇帝はカストリアのギリシャ臣民のキリスト教徒の保護政策を採り、古典神殿の跡地に初期キリスト教会の建立に貢献したのだった。私はそれらの歴史の刻まれた教会の聖画や建造物を見て廻りたいと思った。そんな目的をもった旅だった。

カストリアは 11 世紀頃までは、ビザンチン帝国の商業貿易の一地方の主要な

役割を担い、その繁栄により建造された数々の建築様式からは、当代のビザンチン精神の成果を垣間見ることができる。近年この地の毛皮製品技術者らのアメリカ、イギリス、フランス諸国での移住の成功の蔭には、ビザンチン期の首都からの迫害追放定住者が、この地域の有利な立地条件を利用して育んできた、独自の毛皮技術の継承に負うところがあつたといえよう。

カストリア地方の毛皮産業は、古代から遊牧していた先住民が狩猟による生活の糧を見出した知恵であつたとも考えられる。それらの製品は遠方の首都コンスタンティノポリスの宮廷家や諸侯の貴族婦人は勿論、ダマスカス等の都市まで海上貿易を通して運ばれて行つたのである。栄光の時代のカストリアはイウスティアノス皇帝期であつた。その後、10世紀のブルガリアのシメオン国王の侵略によってカストリアは征服されるが、紀元後990年には同じくブルガリアのサミール国王によってマケドニアは勿論、ペロポネソス半島全域を支配されたのであつた。そのブルガリアによるカストリア地方を解放したのが、後世のビザンチン史で名高いブルガル民族殺し屋皇帝、その名をブルガロクトノスと称されたバシレオス2世皇帝(976-1025)であつた。

当時、ビザンチン帝国内にはさまざま市民戦争が勃発しており、その隙に乗じてブルガリア民族はマケドニア地方や中部ギリシャ一帯やペロポネソス半島を侵略し、42年間の長きにわたり、ドナウ川周辺やアドリア海域を征服支配していたのであつた。イウスティアノス皇帝はニキフォロス・ウラノス將軍の助力と活躍の下、ブルガリア民族をマケドニア地方に追い込み、強靱なカストリアの立地と要塞を基地としてカストリアのみならず、ベリア、セルビア、ボデナ地方を解放したのであつた。イウスティアノス皇帝は1018年に天下分目の古戦場クリデにおいて、ブルガリア国王サミエルを降し、この日をもってブルガリアはビザンチンの一地方として吸収合併された。この出来事によってカストリアはかつての至福の日々を取り戻すことができたのだつた。しかしながら不運にも、カストリアの平和は永続しなかつたのであつた。

ブルガリア民族は1073年には再度カストリアを侵略し、10年後にはノルマン民族が侵入したのだつた。1204年の十字軍による帝国首都の陥落時、アレキシオス・コムニノス皇帝はトレソンドに退避したが、その帝国の防備の不備をつきブルガリアのイアオニス・アサン国王は、アドリア海域のみならずエーゲ海域までも支配下に治め、カストリアを中心に統治したのであつた。1261年のミハエル8世・パレオロゴス皇帝による首都コンスタンティノポリスのラテン民族追放による首都奪還が成功裏に終わると、アルタを首都としてイピロス専

制国が建国され、カストリアはアンゲロス 1 世コムニノス皇帝によって統治されるようになり、再度、イウステニアノス皇帝期の活気と繁栄をもたらすことができたのであった。

ビザンチン山村カストリアへの歴史の追想は、アテネからカストリア空港までの 1 時間 15 分のプロペラ機の空の旅で十分に思えた。気候にもよるのであるが、飛行機は離陸から着陸までほとんど揺れることがなく、快適そのものであった。

カストリア空港は日本でも地方にあるような小規模な空港である。朝早く天気は快晴、私と一緒に降りた乗客の大半は海外移住者の人々であり、カストリアへの里帰りの家族やその友達等であった。だから、観光客らしき人間は私人という有様だった。空港からオリンピック航空のバスで市内までは約 10 キロの行程、15 分程度で念願のカストリアの街にやってきた。1912 年 11 月 11 日にトルコから独立解放した記念日に由来して名づけられた、エンデカトス・ノエンブリウー通りがこの街の中心らしく、数々の毛皮商店や一般商店がこの人気の無い山岳に囲まれた街を、賑やかにしているように見えた。いくつかの大通りを隔てた所に位置するホテルに、シングル用の空部屋があるかどうかフロントに訊ねたが、あいにく無いとのことで近くの所轄の警察署を訪問して、宿の手配を任せることとした。エンデカトス・ノエンブリウー通りにある警察署の警察官はカストリアのパムフレットは備えていないと言い、それでもすばやくシングル部屋の宿泊の手配をしてくれた。既に、私個人がいくつかのホテルに連絡をしてあったのだが、全ての部屋はダブルで受け付けており、この所轄の警察官をあてにするしかなかった。とりあえず警察官が手配してくれたホテルに、荷物を運んでもらうように全てを任せ、ホテル職員が部屋のアレンジをするまではと、市内の散策に出かけた。

カストリアはグラムス山頂から流れでる清水をオリスティヤドオス湖に蓄え、その湖を取り囲むようにベネチア風の住居が立ち並び、湖の沿道にはユーカリが整然と生い茂っていた。ギリシャのあらゆる地方よりも山奥の山奥、山村の山村というに言葉に相応しい風景である。小道を往来する人々に何か訊ねても意気消沈している様に見えるし、それはあたかも何世紀もの暗黒時代の期間に、この地の人々の快活な精神を心の闇の中に埋もれさせてしまい、そのような性格を引き継いだかのように感ぜられる。総人口 1,8 万人に達しないこの山村は、1951 年から海外からの観光客を受け入れるようになったといわれているが、一向に他国の観光客とは行き交わない。ビザンチン期やトルコ支配期に毛皮産業

で栄えたというのに、今では過去の隆盛と活気に満ちたカストリアは、精力的な労働者の海外への移住により、活力が失われたのだろうか。ビーバーが多く生息したといわれる湖も、静寂を漂わせていた。私はミトロポレオス通りを南に歩きオモニア公園まで足を運び、そこにある三つの教会を訪問した。一つ目は14世紀に建立されたとされるイオアニス・プロドロモス教会である。小規模で聖画の残っていないバシリカ様式の教会であった。二つ目の教会は紀元後860年に聖ニコラオスに捧げられた、やはりバシリカ様式の建造物であった。小規模な教会ではあったが、内部の壁にはくまなく聖画が描かれ、よく観察すると、13世紀頃描かれたマケドニア流の流れをくむ画法であった。作者は不詳ではあったが、背景には聖デミトリオス、聖ネクタリオス、聖ヨルゴス等の聖人が鮮明に描写されていた。度重なる戦争の影響であろうか、全ての聖人が軍服を着用していた。三つ目の教会はあいにく閉鎖されていたので、回廊を有するバシリカ様式の教会正面から写真撮影をするしかなかった。この教会が16世紀に建立された聖トリアダ教会であることを確認して、その前方の階段を下り、一路民族博物館へ向かった。ふとギリシャ民家の庭に目をやると、日本でもよく見かける大輪の石楠花が立派に咲いていた。

博物館はラズウ通りの路地の奥に位置し、博物館の反対側には石造りのカストリア風の館が視界を慰め、右手前にはギリシャではお馴染みの草木のない岩山が突き出ている。博物館の見学客は私唯一人だった。午前10時から12時、午後3時から5時までと書かれていたので、係りが開錠してくれるのを首を長くして待っていたが、午前中に開館することはなかった。中世期に栄枯衰勢の歴史を刻んだアイバシスの館は、博物館と化しつつも無言の静寂性を称えていた。

私は頼りない諦めの境地で博物館の入り口でたむろしていると、アテネから来た家族が通りかかり、博物館の係員が公園で子供達とサッカーをして遊んでいるから呼んで来ると良いと教えてもらい、早速一走りして係員のおじさんと呼んで来て開館してもらった。カストリアにはアルホンテコ・スピティ（富豪商人館）が15棟程点在し、この博物館となっている館はデミトリオス・バシリス(1850-1900)の所有だったもので、トルコ期の1515年に建築されており、他の富豪商人館は古くても精々250年前頃に建築されたものであるから、この博物館の重要性が認識される。館に一步足を踏み入れると、それが意外にも数々の大きな部屋から構成されていることに驚嘆する。一階の大家族を養うための食料貯蔵庫には10数個の巨大な壺が並べられ、その反対の部屋に位置する地下の

スペースには、大型のぶどう酒樽が数個置かれていた。カストリア方言でドクサあるいはサラといわれる居間には、カップリング療法で使用する医療器具が他の日用品と共に並べられ、この館の主人バシリスの写真が壁の中央に掲げられていた。応接間の壁には毛皮商人であった彼の両親が、取引でドイツまで出かけた際に購入したリプシア湖の絵画が飾られていた。その部屋の壁には覗き穴が、さりげなく見られた。その覗き穴は 1940 年代まで使用していたのであろうか、応接間で接客している夫とその顧客を、新妻が部屋の中には入らずに、覗き穴を通して観察していたことがうかがえる。当時代の妻に対する道德観というのか貞操観というのか、夫婦間の日常生活の厳しい制約には驚かされるが、中でも最も注目したのは、壁にかけられた新婦から新郎家にもたらされた結婚持参金の明細目録書であった。

1905 年 8 月 25 日付のその書は、署名入りの結婚持参金明細目録書であった。神の名の下、新婦の父親という書き出しで始まり、新婦の持参した不動産や動産、絹の反物や衣類等の詳細が丁寧に記載され、今日のギリシャの結婚においても、揺るがない影響力を与えていることに驚嘆した。アイバシスの館はカストリアの中では最も大規模な富豪商人館であった。暗黒トルコ支配期において親族は一族郎党、常に共同生活をするのが強要されていたから、少なくとも 50 人以上の家族の構成員が互いに尊重し激励しつつ、生活を送っていたことであろう。館の冬の間の一角には、妻が夫の足を洗淨する水盤が置かれ、男尊女卑の風習が永続していたことを物語る。

博物館を後にして、警察官に頼んでおいたホテルにチェック・インを済ませると、私はパンフリット公園横の野外広場にあるタベルナに夕食をとりに行った。周りのギリシャ人家族の会話にはドイツ語や英語が頻繁に飛び交い、それでも時折ギリシャ語を使用するので耳を傾けると、アテネで普段聞いているギリシャ語と何ら変る発音でもなさそうだった。このチョバヌウというタベルナのパンは特に美味しく、スプラキとホーリアティキ・サラダと私が常食としているパタテスを注文して、ビールで舌鼓をうった。

夕食を終えて湖岸沿いに足を進めると、イウスティアノス皇帝の防壁の一角が姿を現した。湖の周りには鈴掛の木々が植林され、湖との均整を保ち、日本でもよく見かける蛙が、歩を進める都度足元から次々に水の中に飛び込んだ。子供達は筏の上ののって水遊びをし、その周りの水草が水に揺られた勢いで、死んで水上に浮かんでいた鯉を岸边に打ち上げた。水は濁っていたが、三輪車の車体の残骸が湖中に放置されていたのが見えた。

湖は海拔 600 メートルの高所に位置し、その面積は 28 平方メートルを誇り、中世期には紺碧なエーゲ海と同様に、透明度では帝国随一という風評があった。当代のビザンチン美人はこのオレスティアドス湖の湖面に、その美貌と優美な姿を映し出して美を競ったというから、綺麗な湖であったことは確かだ。市街を散策していると、商店街の主人達が言い争うのが聞こえた。ローマ帝国の石畳の狭い道路同様に、狭い道が縦横無尽に広がるが、路上の砂埃対策として朝に夕に散水することが、起因しているようだった。この路上の水まきで起こる砂埃に起因する口喧嘩は、カストリアの名物だといわれている。

日没も近づきオレスティアドス湖面に目をやると、つがいであろう 2 羽の白鳥が、優雅に気持ちよさそうに泳いでいた。湖岸では現地人数人が釣りに興じ、コイ科に属するであろうと思われるプラテカやグリニを数匹バケツに収めていたが、聞く処によると、ボラの一種のケファロスや、鱒の一種であるトルナ、うなぎの仲間であるヘロネス、それからギリシャ語でよくいわれる魚類のグリバティ、グリアノス、プリキカも釣れるといっていた。

ホテルに戻る途中、街中で目立ったのはカラバニグリスの勇姿の像であった。彼は対トルコ独立戦争の際、マケドニア地方で活躍し 14 年間の戦闘の結果、カストリアを独立に導いた英雄なのである。1453 年の帝国首都が陥落する 68 年前に、既にカストリアはオスマントルコによって攻撃され、陥落していた。その陥落寸前に、カストリアを治めたビザンチン帝国の皇女が、抵抗して目がくらむ程の大量の黄金を、オレスティアドス湖底に投げ捨てたといわれている。その黄金は、その後発見されたのであろうか？

昼間は活気のなかった市内は、日没がすぎて夜の帳がおりる頃になると、やはり例外なく、カストリア居住者達の老若男女の雑踏で賑わう。公園や野外カフェニオンでは威勢よく話が盛り上がり、ワインと夕食に舌鼓をうちながら、酒神デオニッソスの的な至福の時を味わっている。

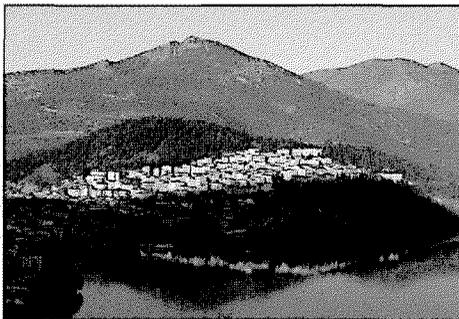
このようにして私のカストリアの旅の一日目は過ぎ去って行ったが、翌日から一週間 60 箇所以上の教会を訪れてみた。最も印象に残ったのは 1083 年のノルマン民族による征服から、アレキシオス・コムニノス皇帝のヨオルゴス・パレオロゴス将軍が解放した村に、大勝利の記念として皇帝が建立した聖母マブリオテサ修道院であった。教会は 15 メートル以上もあるかと思われる、カストリアでは最も高いプラタナスの樹木に包まれ、古い歴史の臭いを漂わせていた。

カストリアは中世第二の都市テサロニキに次いで、ビザンチン考古学の宝庫

を形成する古都である。蛮族の侵入や侵略、征服や統治の荒波に押し流されることなく、正教精神を今日に継承した一村落の役割を果たしてきた一方、毛皮家内産業の技巧技術を世界の都市の隅々まで伝承した由緒ある街でもある。この懐かしい中世の村落をいつしか近い将来、再度踏んでみたいと思うこの頃である。



聖ステファノ教会



カストリア